

# ヨーガ行者の8種の自在力(1)

—『チャラカ本集』「身体論篇」の  
記述を手がかりとして—

金 沢 篤

はじめに：「超能力」への視点

インド古来の文献の中には、種々「超能力」(siddhi, rddhi, abhijñā, aiśvarya,...) についての記述が散見される。本稿の表題にある「自在力」も、そうした「超能力」を言い表す用語の一つに過ぎないが、サンスクリットの名詞が様々であると同様に、それを現代語に移し替える際の名詞も様々である。むろん、どれがどれに対応するのか、にわかには定め難いし、その違いの内実も明確ではない。ただし、筆者の場合、「自在力」とは、サンスクリット語 aiśvarya(=iśvaratva) に対する訳語として用いていること、したがって、それは「自在者性」の同義語として用いられていることだけは、先ずは明記しておきたい。さらにそれに関連して言うならば、形象Aが、なにがしかの手続きを経て「成就者」(siddha) となる。これは、換言するならば、そのAが「成就」(siddhi)したことを意味する。その場合、その「成就者」Aには[属格]、「成就」=「成就者性」(siddhatva) が[主格]ある、と表現し得るのであり、その「成就」=「成就者性」は、成就者Aが所有することになる「超能力」と同置され、したがって、「成就力」(siddhi)と表現するすることも可能となる点を忘れるべきではない。さらに、「[能]力」とは、種々「属性」を含めて、そのものが所有すると表現し得るもの全てに適用し得る語であるという点も確認しておくべきであろう。

例えば、有名な「ナラ王物語」の中には、初めて対面の適ったダマヤンテー姫とナラ王の間に以下のような会話もたれるが、その短いフレーズを通してさえ、「超能力」というものの持つこうした位相は、明瞭に看取できるのである。

(oi) katham āgamaṇaṃ ca'īha katham ca'asi na lakṣitaḥ /

surakṣitaṃ hi me veśma rājā ca^eva^ugra-śāsanah //

.....

teṣāṃ eva prabhāvena praviṣṭo^aḥaṃ alakṣitaḥ //(Mbh III-52-20 ~ 23)

(01) 「・・・そして、如何にして、[あなたさまの] ここへのお出ましが [ありましたでしょうか] か？ また、如何にして、あなたさまは見 [咎め] られることがなかったのでしょうか？ なぜならば、わたしの住居は、よく警護されており、しかも、わたしの [父] 王は、厳格な統率者であるわけですから。・・・」 (ダマヤンティー姫)

「・・・他ならぬかの [神々] の、威神力(prabhāva)のおかげで、わたしは、見 [咎め] られることなく、[ここに] 入ってきたのです。・・・」  
(ナラ王)

いかがであろうか？ 普通の人間にはなし得ないことを、ナラ王は、神々の有する「威神力」=「超能力」によって、なし得たのである。ここで見るように、ナラ王自身によって、その種明かしがなされなかったとしたら、ナラ王には、「自在に姿を消す」という「超能力」があると言われるところであったのである。普通の人間には夢のような能力も、神々には、不思議でもなんでもないのである。その場合、ナラ王自身が持つことになった尋常ならざる「超能力」とは、「自在に姿を消す」という「超能力」を持つ尋常ならざる神々との関係者性のことである。人間の誰もがナラ王の持ち得た、その「超能力」を持っているわけではないからである。また、同じ「ナラ王物語」の、か弱きダマヤンティー姫が、寄るべなき森の中で、ただ一人野卑な獵師と渡りあった際の以下の条りを見ておくことも、今の場合、無駄ではあるまい。ダマヤンティー姫は、思いもかけなかった「超能力」を駆使して、屈強な獵師を打倒するのである。

(oii) damayantī tu taṃ duṣṭam upalabhya pati-vratā/

tīvra-roṣa-samāviṣṭā prajajvāla^iva manyunā //

sa tu pāpa-matiḥ kṣudrah pradharṣayitum āturaḥ /

durdharṣaṃ tarkayāmāsa dīptāṃ agni-śikhāṃ iva //

damayantī tu duhkha-ārtā pati-rājya-vinā-kṛtā /

atīta-vāk-pathe kāle śasāpa^enaṃ ruṣā kila //

yathā^aḥaṃ naiṣadhād anyam manasā^api na cintaye /

tathā^ayam patatām kṣudrah parāsur mṛga-jīvanah //

ukta-mātre tu vacane tathā sa mṛga-jīvanah /  
 vyasuḥ papāta medinyām agni-dagdha iva drumah //  
 sā nihatya mṛga-vyādham pratasthe kamala-ikṣaṇā /  
 vanam pratibhayam śūnyam jhillikā-gaṇa-nāditam //(Mbh III-60-34 ~ 61-1)

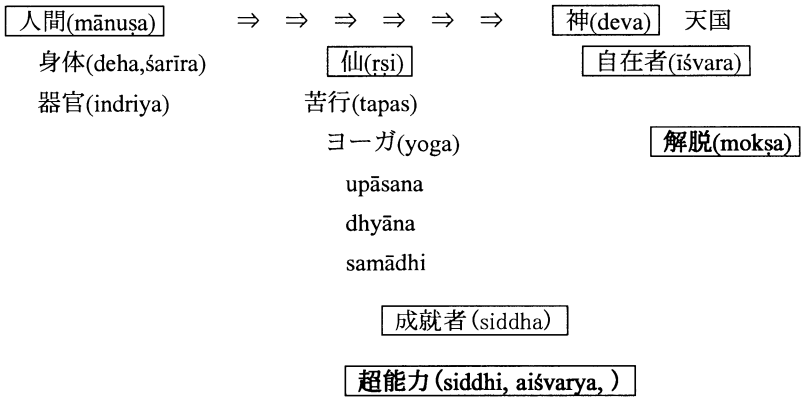
(02) 一方、貞淑な、ダマヤンティーは、かの〔猟師〕を、墮落したと、見て取るや、激しき怒りに駆られ、激情によって、あたかも燃え上がったかのようにした。一方、悪意を持てる、卑しき、かの〔猟師〕は、手籠めにせんとしましたが、輝いて、あたかも、火を頭上に持つ者の如き〔彼女〕を、近づき難いものと思量しました。一方、主と王国を奪われて、苦に悩める、ダマヤンティーは、言語道断の時にあって、実に、怒りによって、かの〔猟師〕を、呪詛しました。「わたしは、ニシャダ国王以外の他者を、心(manas)によってであれ、考慮しない、それ故に、この、卑しき、猟師は、息絶えて、倒れ伏すべし。」

一方、〔その〕言葉が、言われるやいなや、その〔言葉〕通りに、その、猟師は、あたかも、火で焼かれた、樹木のように、絶命して、大地に、倒れ伏しました。

蓮華の顔容を持てる、かの〔ダマヤンティー〕は、〔その〕猟師を、打ち負かした後に(nihatya)、蟋蟀の群れの鳴き声のする、人気ない、森へと、畏る畏る、歩を進めました。

さて、この「超能力」である。今日日常会話の中でそれを口にする場合、発話者に自らのスタンスを否応なく自覚せしめる手のものであるが、通常の人間と、その人間とは較べものにならない能力(=超能力)の保持者たる神々がごく自然に共存するインド的文脈の中では、ごく自然に受け止められる用語であり、概念である。その「超能力」は、文献の中では、たいていは類型的な表現を得ており、本稿が主眼とする「8種類の自在力」との分類法・表現を含めて、それら相互の間には、なにがしか深い関連性があると直ちに了解される。だが、その一方で、それらの記述は時に整合性を欠き、齟齬し、錯綜しているように見える。その複雑に絡み合った系譜の糸をきちんと解きほぐすことは、いわば至難の業である。不可能であるとまで言い得るようにも思う。だが、これまでも古今東西の多くの学者たちが、その問題にアプローチもしているし、それなりの成果をあげているようにも思われ、いまさらの観がないわけではないが、本稿では、インドの伝承医学文献『チャラカ本集』Caraka-saṃhitā(Cs)に

において遭遇したその一用例を端緒に、「8種類の自在力」という分類法に特に注目して、やや初歩的に、また、やや組織的にアプローチしてみたい。蓄積された種々記述の間の、系統を改めて辿り、齟齬の実態を検証し、錯綜の謎を解き明かすことを秘かに目指したものだが、その内実は言うまでもなく新味に乏しいもので、結局は、既存の研究成果を整理して、簡単にしかも拙くまとめただけのものとなるかも知れない。次節以下の議論をスムーズに進める為にも、筆者が考えるインド的文脈における「超能力」を、いわば作業仮説の如きものとして、次のように図示しておきたい。



## 1. 『チャラカ本集』の自在力

Cs 第4「身体論篇」(Śārīra-sthāna)第1章の終結部には、以下のような記述が見られる。インドにおける、医学の伝統とヨーガの伝統の交錯の一例であり、その両者の関係を伺う上でも貴重な第一級の資料である。むろん、今の場合注目すべきは、「ヨーガ行者の8種類の自在力」と総括する第141偈であり、その具体的な列挙と考えられる第140偈であるが、その意味するところは決して明確ではない。

(i) yoge mokṣe ca sarvāsāṃ vedanānām avartanam /  
 mokṣe nivṛttir niḥśeṣā yogo mokṣa-pravartakah //137//  
 ātma-indriya-mano-arthānām sannikarṣāt pravartate /  
 sukha-duḥkham anārambhād ātma-sthe manasi sthire //138//  
 nivartate tad ubhayam vaśitvam ca<sup>^</sup>upajāyate /

saśarīrasya yoga-jñās taṃ yogam ṛṣayo viduḥ //139//

āveśaś cetaso jñānam arthānām chandataḥ kriyā /

dr̥ṣṭiḥ śrotram smṛtiḥ kāntir iṣṭataś ca^apy adarśanam //140//

ity asta-vidham ākhyātam yoginām balam aiśvaram /

śuddha-sattva-samādhānāt tat sarvam upajāyate //141//

mokṣo rajas-tamo-abhāvāt balavat-karma-samkṣayāt /

viyogaḥ sarva-samyogair apunar-bhava ucyate //142// (Cs IV-1-137 ~ 142:p.300)

そして、われわれは、こうした記述に遭遇した時に、果たしてそれをどう理解したらよいのだろうか？ 周知の通り、Cs に関しては、既に数多くのテキストが出版され、近現代語による翻訳研究も少なからずある。また、他の古典作品と違って、Cs は、長年受け継がれ、今もなお生き続けているインド医学の正典と言うべきものである。現代の医学の通念に真っ向から反するよう見えるものでも、そのままに解釈すべきものであるとも言えるのである。不明の箇所はそのままにして、とりあえずは、以下のように訳してみた。

(1) ヨーガ時、及び解脱時には、一切の感覚の発起はない。解脱時における、止退(nivṛtti)は、余すところがない。ヨーガは、解脱を引き起こすものである。<137>

アートマン・器官(indriya)・マナス・対象物(artha)の接触(sannikarṣa)に基づいて、楽(sukha)・苦(duḥkha)は、発起する。マナスが、アートマンに住して、堅固なる時、[マナスの] 不発の故に、<138>

有身者には、その[楽・苦の]、両者は、止退し、そして、統治者性(vaśitva)が、生じる。ヨーガを知れる聖仙たちは、そ[の事態：楽・苦の止退と統治者性の生起]を、ヨーガと、知るのである。<139>

① āveśaś cetaso ② jñānam arthānām chandataḥ ③ kriyā ④ dr̥ṣṭiḥ ⑤ śrotram ⑥ smṛtiḥ ⑦ kāntir さらにまた、iṣṭataś.... ⑧ adarśanam、<140>

以上の、8種類が、ヨーガ行者たちにとっての、自在者的な(aiśvara)力(bala)と、称される。清浄な(śuddha)、サットヴァ(sattva) [有するもの] の、三昧(samādhāna)に基づいて、その[自在者的力の、] 一切が、生じるのである。<141>

解脱は、ラジャス・タマスの非存在の故に、[また、] 有力な[過去の] 行為／業(karman)の滅尽の故に、一切の結合との離結(viyoga)であり、非再生(apunar-bhava)、と言われるのである。<142>

ところで、今敢えて訳語を付さずに放置した、その「8種類の自在力」の内実を知るためには、どうすればよいか？ Cs の場合は、まずは、定評のあるチャクラパーニダッタ Cakrapānidatta のサンスクリット註『アーユルヴェーダディーピカー』Āyurvedadīpikā(CCs)を見るにしくはないであろう。

(ii) āveśa ity ādi / āveśaḥ para-pura-praveśaḥ / cetaso jñānam iti para-citta-jñānam / arthānām chandataḥ kriyā<sup>ti</sup> arthānām icchātaḥ karaṇam / dr̥ṣṭiḥ atīndriya-darśanam / śrotram atīndriya-śravaṇam / smṛtiḥ sarva-bhāva-tattva-smaraṇam / kāntiḥ amānuṣī kāntiḥ / iṣṭataś ca<sup>apy</sup> adarśanam iti yadā<sup>ic</sup>chati tadā darśana-yogyā eva na dr̥śyate, yadā ca<sup>ic</sup>chati tadā dr̥śyate / kim vā, āveśaś cetasa iti para-cetasah praveśaḥ, jñānam iti sarvam atīta-anāgata-ādi-jñānam, śeṣam pūrvavat / aiśvaram iti yoga-prabhāvad upapanna-aiśvarya-kṛtam / śuddha-sattva-samādhānād iti nirajastamaskasya manasa ātmani samyag-ādhānāt // (CCs IV-1-140 ~ 141:p.300)

(2) [Cs IV-1-140 には、] {āveśa}等と [言われる]。{① āveśa}とは、他者の都城(pura)に入ること(praveśa)である。{cetaso ② jñānam}とは、他者の心(citta)の知(jñāna)である。{arthānām chandataḥ ③ kriyā}とは、諸対象物に対する、欲求に基づく(icchātaś)、作為(karaṇa)である。{④ dr̥ṣṭiḥ}とは、超器官的なもの(atīndriya)を見ること(darśana)である。{⑤ śrotram}とは、超器官的なものを聴くこと(śravaṇa)である。{⑥ smṛti}とは、一切の諸存在／状態(bhāva)の真実(tattva)を想起すること(smaraṇa)である。{⑦ kānti}とは、非人間的な(amānuṣī)、魅力(kānti)である。さらにまた、{iṣṭataś..... ⑧ adarśanam}とは、[その者が、] 欲求する(icchati)、その時に、他ならぬ被見適合性を持つ(darśana-yogyā) [その者が] 見られず、[その者が、] 欲求する、その時に、[その者が] 見られる(dr̥śyate) [ということである]。あるいはまた、[別様に解釈して、] {āveśaś ① cetasaś}とは、他者 [へ] の心の、入ること(praveśa) [という意味] である。{② jñāna}というのは、一切の、過去(atīta)・未来(anāgata)等の知である。残余(śeṣa) [の③～⑧にかけて] は、先の [解釈] と同様である。{aiśvara(自在者的な)}というのは、ヨーガの威力に基づいて、具足された自在者性=自在力(aiśvarya)によって為された、[という意味である]。{śuddha-sattva-samādhānād(清浄なる、サットヴァ [を有するもの] の、三昧に基づいて)}というのは、ラジャス・タマスの両者を欠く(nirajastamaska)、マナスの、アートマンへの、正しい(samyak)付置(ādhāna)に基づいて、[という意味] である。

いかがであろうか？ この Cakrapānidatta の註釈によって、われわれは、医学書 Cs に登場する、ヨーガ行者の「8 種類の自在力」の全容を、他の助けを借りることなくして、ほぼ正しく知ることが出来るのである。以下の通りである。

【CCs による、Cs における自在力 8 分類—タイプA】	【GCs による】
① [他者の身体に] 入ること// [他者への] 心の入ること	Ys III-38
② [他者の] 心の知// [一切の三時の] 知	Ys III-25 ~ 29,34
③ 対象物に対する欲求のままなる作為	Ys III-42
④ [超] 視	Ys III-32
⑤ [超] 聴	Ys III-41
⑥ [一切の如実] 想起	Ys III-45
⑦ [超人的] 魅力	Ys III-46
⑧ 恣意的不見	Ys III-21

この、ヨーガ行者の「8 種類の自在力」が、清浄なサットヴァ [を有するもの] の三昧=ラジャス・タマス<sup>1</sup>を欠くマナスのアートマンへの正しい付置に基づいて生じる、と有名な医学書 Cs は伝えているのである。ここに見られる、サットヴァ、ラジャス、タマスは、いわゆるサーンキヤ哲学で有名な、古典インド世界の存在論において多用される説明原理、トリ・グナ三徳である。未開展者/根本原質より開展せる一切は、いわば三徳所成であり、ここで註記される「マナス」も通常は三徳所成と言えるが、ヨーガ行者のある状況下では、清浄なサットヴァ [純粹サットヴァ所成状態] マナスが実現され、そのマナスの、アートマンへの適正付置に基づいて、如上の「8 種類の自在力」が生じるとされる、それがいわゆるヨーガの達成であり、それは、「解脱を引き起こすもの」と説明されているのである。

さて、以下には、上に見たヨーガ行者の「8 種類の自在力」について、さらなるパースペクティヴを得るべく、Cs の解説に欠かせない、ガンガーダラ・カヴィラトナ Gaṅgādhara Kaviratna によるもう一つのサンスクリット註、『ジャルパカルパタル』 Jalpakaḥpataru(GCs) の記すところを見てみよう。

(iii) nanu vaśitvam eva kiṃ yoga-samādhito jāyate na tv anyad ity ata āha —  
āveśaś ca<sup>2</sup> ity ādi / śuddha-sattva-samādhānāt rajas-tambohyāṃ vinimmukta-manah-

samādhānāt tad āveśa-ādikaṃ sarvvam upajāyate / tad yathā / śuddha-manah-samādhānena sva-artha-indriya-artha-grahaṇān nivr̥ttasya manasa ātmani sthira-rūpeṇa avasthitau vyādhi-styāna-saṃśaya-pramāda-ālasya-[a]virati-bhrānti--darśana-alabdha-bhūmikatva-anavasthitatvānām cittasya vikṣepānām antarāyānām abhāvāt pratyag-ātma-adhigamāc ca cetasa āveśa-ādy aṣṭa-vidhaṃ yoginām aiśvaram iśvara-bhāva-adhigame balaṃ bhavati /<1>

(3) 「[Cs IV-1-139 で言う] 統治者性(vaśitva)」だけ(eva)が、ヨーガの三昧に基づいて、生じるのであって、[その統治者性とは] 別のものは、[生じ] ないのではないかと、この[懸念の] 故に、[Cs IV-1-140 で、] 述べる。そして、{āveśa}等と。{śuddha-sattva-samādhānāt(清浄な、サットヴァ [を有するもの] の、三昧に基づいて)}、ラジャス・タマスの両者から解放された、マナスの、三昧に基づいて、その{① āveśa(入)}等の、一切が、生起するのである。すなわち、清浄な [サットヴァ状態の] マナスの三昧によって、自己の対象物・器官の対象物の把握(grahaṇa)を、止退した(nivr̥tta)、マナスが、アートマンのうちに、堅固な体(rūpa)をもって、止住する時に、病氣(vyādhi)・昏沈(styāna)・疑惑(saṃśaya)・放逸(pramāda)・懈怠(ālasya)・不遠離(avirati)・迷妄見(bhrānti)・未所得地性(alabdha-bhūmikatva)・不定者性(anavasthitatva)という、心(citta)の、障碍たる、諸散乱(vikṣepa)の、非存在の故に、また、心の、内我に対する証得の故に、{āveśa}等の、8 種類の、自在者的な(aiśvara)、[すなわち] 自在者性(iśvara-bhāva)の証得(adhigama)に [適う] 力(bala)が、ヨーガ行者たちに、生じるのである。<1> yoginām hi trayoviṃśatiḥ siddhayaḥ ; pañca kṣudra-siddhayaḥ, daśa guṇa-pradhānāḥ siddhayaḥ, aṣṭau brahma-pradhānāḥ siddhayaḥ / tri-kāla-jñatvam advandvaṃ para-citta-ādy-abhijñātā / agny-arka-ambu-ṛṣa-ādīnām stambhaś ca apy aparājayaḥ / iti pañca kṣudrāḥ siddhayaḥ /<2>

実に、ヨーガ行者には、23 の成就力(siddhi)、[すなわち] 5 つの小成就力(kṣudra-siddhi)、10 の徳主成就力(guṇa-pradhāna-siddhi)、8 つの梵主成就力(brahma-pradhāna-siddhi)が、[生じる]。① 三時知者性(trikāla-jñatva)、② 非相対者性 (advandva)、③ 他心等知者性(paracitta-ādi-abhijñātā)、火・光・水・毒などに対する、④強韌性 (stambha)、及び、⑤不屈性(aparājaya)という5つが、小成就力である。<2>

asmin dehe anūrmnivattvaṃ dūra-śravaṇa-darśanaṃ mano-javi-tvaṃ kāma-rūpaṃ



para-kāya-praveśaḥ svecchāmṛtyur deva-kriḍā-anudarśanaṃ yathā-saṅkalpa-siddhir  
ājñā-siddhir avyāhata-gatiḥ / iti daśa guṇā-pradhānāḥ siddhayaḥ /<3>

この、身体における、①静穏性(an-ūrmivattva)、② 遠隔聴・視力  
(dūra-śravaṇa-darśana)、③意迅速性(mano-javi-tva)、④如意体性(kāma-rūpa)、  
⑤ 他身入(para-kāya-praveśa)、⑥自欲偽死(svecchā-mṛtyu)、⑦神戯随見  
(deva-kriḍā-anudarśana)、⑧如意成就力(yathā-saṅkalpa-siddhi)、⑨命令成就  
力(ājñā-siddhi)、⑩自在進行(avyāhata-gati)、という10が、徳主成就力であ  
る。<3>

aṇimā mahimā laghimā prāptiḥ prākāmyam īsitvaṃ vaśitvaṃ kāma-avaśāyitā ca /  
ity aṣṭau brahma-pradhānāḥ siddhayaḥ / <4>

①微細さ(animan)、②大いさ(mahiman)、③軽さ(laghiman)、④到達(prāpti)、  
⑤楽欲(prākāmya)、⑥支配者性(īsitva)、⑦ 統治者性(vaśitva)、⑧欲望止  
住者性(kāma-avaśāyitā)、という8つが、梵主成就力である。<4>

tāsām sādharmaṇa-kāryyatvena idam aṣṭa-vidham aiśvaraṃ balaṃ yoginām uktam /  
āveśaś cetasa iti samādhir dvi-vidhaḥ savijo nirvvijaś ca / <5>

それら[23の成就力]と、共通の結果が[得られるという]こと  
(sādharmaṇa-kāryatva)で、以下の、8種類の、自在者的な(aiśvara)、力が、ヨー  
ガ行者のものとして、言われたのである。《①入(āveśa)、心(cetas)の》と。  
三昧は、有種子と無種子の、二種類である。<5>

tatra vakṣyamāṇaiḥ satām upāsana-ādibhiḥ śuddhe manasi manasaḥ  
para-śarīra-āveśa-ādi-kāri samādhīḥ savijāḥ / tad yathā /

{bandha-kāraṇa-śaithilyāt pracāra-saṃvedanāc ca cittasya para-śarīra-āveśaḥ //38//}  
{lolībhūtasya manaso apratiṣṭhitasya śarīre karma-āsaya-vaśād bandhaḥ pratiṣṭhā /  
tasya karmaṇo bandha-kāraṇasya śaithilyaṃ samādhī-balād bhavati /  
pracāra-saṃvedanañ ca cittasya samādhī-jam eva / karma-bandha-kṣayāt sva-cittasya  
pracāra-saṃvedanāc ca yogī cittaṃ sva-śarīrān niṣkṛṣya śarīra-antareṣu niṣīpati /  
niṣīptaṃ cittañ ca indriyāṇy anupatanti yathā madhu-kara-rājaṃ prakṣikā  
utpatantam anūpatanti niviśyamānam anuviśante tathā indriyāṇi  
para-śarīra-āveśe cittam anuvidhīyante}(38) iti / <6>

そのうち、[Cs IV-1-143 ～に於いて] 述べられるであろう、「諸真実/  
善なるもの(sat)に対する崇敬/念想(upāsana)」等によって、マナスが、  
清浄になる時に、[その] マナス の、他者の身体への入などを作為する、

三昧が、有種子である。

すなわち、「繫縛(bandha)の因(kāraṇa)の弛緩(śaithilya)と、逍遙 (pracāra)の自覚(samvedana)に基づいて、心の、他者の身体への入が、ある。」(Ys III-38)

「波打ち(lolībhūta)、不安定な(apraṭiṣṭhita)、マナスは、[過去の] 行為／業の積聚の力で、身体への、繫縛が [ある、すなわち]、依止 (praṭiṣṭhā)するのである。繫縛の因たる、その行為／業の、弛緩は、三昧の力に基づいて、生じる。また、心の、逍遙の自覚は、三昧より生じるものに、他ならない。行為／業に基づく繫縛の滅尽に基づいて、さらに、自らの心の、逍遙の自覚に基づいて、ヨーガ行者は、心を、自らの身体より、引き出して (niskrsya)、諸々の別の身体(śarīra-antara)の中に、投置する(niksipati)のである。そして、投置された心に、諸器官は、随従するのである。ちょうど、諸蜜蜂が、飛翔しつつある、蜜蜂の王に、随翔する、帰巢しつつある (niviśyamāna) [蜜蜂の王] に、随入する、そのように、諸器官は、[心の、] 他者の身体への入が [なされた] ならば、[その] 心に、服従するのである。」(VYs III-38)と。<6>

arthānām jñānam iti / pātañjale / {pravṛṭty-āloka-nyāsāt sūkṣma-vyavahita-viprakṛṣṭa-jñānam//25//} {bhuvana-jñānam sūrye samyamāt//26//} {candretārā-vyūha-jñānam//27//} {dhruve tad-gati-jñānam//28//} {nābhi-cakrekāya-vyūha-jñānam //29//} {hṛdaye citta-samvit //34//} iti <7>

《諸対象物(artha)に対する、②知(jñāna)、》というのは。パタンジャリの『『ヨーガストラ』』(pātañjala)には、[以下のように、述べられている。]「作用(pravṛtti)の光明(āloka)の照射(nyāsa)に基づいて、微小なるもの(sūkṣma)・遮られたもの(vyavahita)・遠くのもの(viprakṛṣṭa)に関する知が、ある。」(Ys III-25)、「太陽への、総制(samyama)に基づいて、世界(bhuvana)に関する知が、ある。」(Ys III-26)、「月(candra)への、[総制に基づいて、] 星(tārā)の配置(vyūha)に関する知が、ある。」(Ys III-27)、「北極星(dhruva)への、[総制に基づいて、] その[星々の] 運行(gati)に関する知が、ある。」(Ys III-28)、「臍輪(nābhi-cakra)への、[総制に基づいて、] 身体(kāya)の配置に関する知が、ある。」(Ys III-29)、「心臓(hṛdaya)への、[総制に基づいて、] 心に関する意識(samvit)が、ある。」(Ys III-34) と。<7>

vyāsa-bhāṣyaṅ ca'eṣām /

{jyotiṣmatī pravṛttir uktā, manasaḥ tasyā ya ālokaḥ taṃ yogī [[nyasya]] sūkṣme [vā] vyavahite [vā] viprakṛṣṭe vā<sup>arthe</sup>artham [vinasya taṃ artham] adhigacchati/}(25) {sūryye saṃyamāt bhuvana-jñānam //26//}{sūryya-maṇḍala-sthāḥ sapta lokāḥ, tatra meroḥ udīci-prabhṛti meru-prṣṭhaṃ yāvad ity eṣa bhūr-lokaḥ / meru-prṣṭhād ārabhya dhruvāt grahana-kṣatra-tārā-vicitr<sup>antarikṣa</sup>-lokaḥ / tat-param svar-lokaḥ pañca-vidhaḥ māhendras tṛtīyaś caturthaḥ prajāpatyo mahar-lokaḥ tridho brahma-loko jana-tapaḥ-satya-bhedāt / }(26) {candre tārā-vyūha-jñānam //27//} {candre saṃyamam kṛtvā tārā-vyūhaṃ vijānīte}(27) / {dhruve tad-gati-jñānam //28//} {dhruve saṃyamam kṛtvā tāsām tārāṇāṃ gatiṃ vijānīyāt / } (28) {nābhi-cakre saṃyamam kṛtvā kāya-vyūhaṃ vijānīyāt / } (29) {hrdaye citta-saṃvit //34//} {《yad idam asmin brahma-pure daharam puṇḍarikam veśma 》 (Chup.,8-1-1)tatra vijñānam / tasmin saṃyamāc citta-saṃvit}(34) ity ādi / <8>

そして、それら〔諸スートラ〕に対する、〔以下の如き〕ヴィヤーサの註解がある。

「作用は、光明を有する(jyotiṣmat)と、言われている。マナスのものである、その〔作用〕にある、その、光明。その〔光明〕を、ヨーガ行者は、微小な、遮られた、あるいは、遠くの、対象物に、照射した後に、対象物に証得するのである。」(VYs III-25)「太陽への、総制に基づいて、世界に関する知が、ある。」(Ys III-26)「7つの世界は、太陽の光輪に住している。そのうち、スメール山の北に始まり、スメール山の背後にいたるまで、という、それが、地=界(bhūr-loka)である。スメール山の背後に始まり、北極星に〔いたるまでの、〕遊星・恒星・星で多彩なのが、中空=世界(anatrikṣa-loka)である。その〔中空=世界の〕向こうに、5種類の、天=界(svar-loka)がある。第3は、大インドラ〔世界〕(mahendra)、第4は、ブラジャーパティの、マハル世界(mahar-loka)である。ブラフマ世界(brahma-loka)は、ジャナ/人間・タパス/苦行・サティヤ/真実(satya)の区別によって、3種類である。」(VYs III-26)「月への〔総制に基づいて、〕星の配置に関する知が、ある。」(Ys III-27)「月への、総制を為した後に、〔かの者は、〕星の配置を、知るのである。」(VYs III-27)「北極星への〔総制に基づいて、〕その〔星々の〕運行に関する知が、ある。」(Ys III-28)「北極星への、総制を為した後に、〔その者は、〕その、星々の、運行を、知るであろう。」(VYs III-28)「臍輪への、総制を為した後に、〔その者は、〕

身体の配置を、知るであろう。」(Ys III-29)「心臓への、[総制に基づいて、] 心に関する、意識がある。」(Ys III-34)「この、ブラフマンの都城(brahma-pura)に、ある、他ならぬ、その、保持処にして、蓮華である、住居、その[住居である心臓]に、知が[生じる]。その[心臓]への、総制に基づいて、心に関する意識が、[生じる。]」(VYs III-34)などと。 <8>

chandataḥ kriyā / svecchayā karmma-karaṇam bhavati / yathā pātañjale {kāya-ākāśayoḥ sambandha-saṃyamāt laghu-tūla-samāpattes ca<sup>ˆ</sup>ākāśa-gamanam //42//} <9>

《欲求のままなる(chandatas)③作為(kriyā)、》[というのは。]自欲(svecchā)によって、行為の作為が、生じる。パタンジャリの『『ヨーガスートラ』』に、[以下のように、述べられている]ように。「身体と虚空両者の、関係(sambandha)への総制に基づいて、また、軽い綿への等至(samāpatti)に基づいて、虚空に於ける進行がある。」(Ys III-42) <9>

{yatra kāyas tatra<sup>ˆ</sup>ākāśam tasya<sup>ˆ</sup>avakāśa-dānāt kāyasya/tena sambandhaḥ prāptiḥ / tatra kṛta-saṃyamō jivā tat-sambandham laghu-tūla-ādiṣu ā parama-aṅubhyaḥ samāpattiṃ labdhvā jita-sambandho laghur laghtvāc ca jale pādābhyam viharati / tatas tu<sup>ˆ</sup>ūrṇa-nābhi-tantu-mātre vihr̥tya raśmiṣu viharati / tato yathā-iṣṭam ākāśe gatir asya bhavati/} (42) ity evam-ādi-svecchayā gamana-ādi-kriyā-śaktiḥ/ <10>

「身体のある、そのところに、虚空がある。その[虚空]には、身体に対して、余地を与えることがあるが故に。その[虚空]との、関係が、到達なのである。その[虚空]への、総制を為したる者は、その[虚空]との関係を、制覇し、極微に至るまでの、軽い綿等への、等至を得て、関係を制覇した者は、軽く(laghu) [なる]。そして、軽いが故に、水上を、両足で、逍遙するのである。しかるに、次いで、ただ蜘蛛(ūrṇa)の糸(tantu)上を、逍遙した後に、諸光線(raśmi)上を逍遙するのである。そして、かの者には、望みのままの、虚空中の、進行が、生じるのである。」(VYs III-42) といった、こうしたような自欲によって、進行等の作為能力が、ある。<10>

dr̥ṣṭir divya-cakṣur bhavati / {mūrddha-jyotiṣi siddha-darśanam//32//} {śiraḥ-kapāle cchidram prabhāsvaram jyotis tatra saṃyamāt siddhānām dyāvā-prthivyor antarāla-carāṇām darśanam / } (32) ity ādi / śrotram iti / divyam śrotram bhavati / {śrotra-ākāśayo randhra-saṃyamād divyam śrotram //41//} {sarvva-śrotrānām ākāśaḥ pratiṣṭhā sarvva-śabdānān ca / tad uktam / 《tulya-deśa-śraṇānām eka-deśa-śrutitvam sarvveṣām bhavati》<sup>ˆ</sup>iti ; tac ca<sup>ˆ</sup>etad ākāśasya liṅgam / }

(VYs III-41) <11>

《④ [超] 視(dṛṣṭi)》とは、天的な視覚(divya-cakṣus)のことである。「額の光明(mūrdha-jyotis)への、[総制に基づいて、] 成就者の見が、ある。」(Ys III-32) 「頭骸(śiraḥ-kapāla)に於ける、割れ目(chidra)にある、光(prabhāsvara)が、光明(jyotis)であるが、その[光明]への、総制に基づいて、諸々の成就者たちには、天(dyāvā)と地(prthivi)の両者の、中空(antarāla)に於ける、諸行作を、見るがあるのである。」(VYs III-32)といったようなものである。《⑤ [超] 聴 (śrotra)、》というのは、天的な(divya)、聴覚、ということである。「聴覚と虚空の両者の、割れ目(randhra)への総制に基づいて、天的な、聴覚が、ある。」(Ys III-41)「虚空は、一切の聴覚の、また、一切の音声(śabda)の、依処 (pratiṣṭhā)である。そのことが、言われている、《一切の、等しい場所(deśa)に於ける聴取(śravaṇa)は、同一の(eka)場所(deśa)に於ける聴取(śruti)である。》と。そして、まさしくそれは、虚空の徴表である。」(VYs III-41) <11>

{anāvaraṇaṅ ca^uktam / tathā^amūrttasya^anāvaraṇa-darśanād vibhutvam api prakhyātam ākāśasya / śabda-guṇa-anumitaṃ śrotram, badhira-abadhiraḥ ekah śabdaṃ na grhṇāti aparo grhṇāti tasmāt śrotram eva śabda-viśayaṃ, śrotra-ākāśayoḥ sambandhe kṛta-saṃyamasya yogino divyaṃ śrotram pravarttate }(41) iti / <12>

「また、非覆 (anāvaraṇa)が、[虚空の徴表であると] 言われている。同様に、形のないもの(amūrta)には、非覆が、見られるが故に、虚空には、遍在者性(vibhutva)もまた、言われているのである。聴覚は、音声という属性によって、比量される。聾者(badhira)と非聾者(abadhira)の両者のうち、前者は、音声を把捉しないし、後者は、把捉する。それ故に、音声を対象とするものが、聴覚に他ならないのである。聴覚と虚空の結合への、総制を為したるヨーガ行者には、天的な、聴覚が、発動するのである。」(VYs III-41)と。 <12>

smṛtir iti / vakṣyate tv atra^eva—vakṣyante kāraṇāṅy aṣṭau ity ādinā / kāntir avāntaram {ānima-ādi-prādurbhāvaḥ kāya-sampat tad-dharmma-anabhighātaś ca //45//} {rūpa-lāvanya-vajra-saṃghanatva-ādiḥ kāya-sampad //46//} iti kāntir bhavati / <13>

《⑥ [前世] 想起》というのは。しかるに、他ならぬ、これに関しては、[後に] 述べられるであろう。「8つの因が、述べられるであろう。」等と。

《⑦[超]魅力(kānti)》というのは、[以下のように]別個に。「微細さ(añiman)等の発現が、身体の完成 (kāya-sāmpad)が、そして、その[身体の]属性(dharma)の非損 (anabhighāta)が、ある。」(Ys III-45)「身体の完成とは、体・愛らしさ・金剛の堅固さ等である。」(Ys III-46)というのが、魅力である。  
<13>

īṣṭataś ca^apy adarśanam iti / svecchayā^antaraddhānam bhavati / pātāñjale /{kāya-rūpa-sāmyamāt tad-grāhya-śakti-stambhe cakṣuḥ-prakāśa-asamprayoge^antaraddhānam //21//} {kāya-rūpa-sāmyamāt rūpasya grāhya-śaktim pratibadhnāti, grāhya-śakti-stambhe sati cakṣuḥ-prakāśā-asamprayoge^antaraddhānam utpadyate yoginaḥ / etena śabda-ādy-antaraddhānam uktaṃ veditavyam }(21) iti / <14>

《そしてさらに、恣意的(iṣṭatas)⑧不見 (adarśana)、》というのは。自欲(svecchā)よっての、隠失(antardhāna)、ということである。パタンジャリの『ヨーガスートラ』に、[以下のように、述べられている]ように。

「身体の形体への総制に基づいて、そ[の身体の形体]の、所取能力(grāhya-śakti)が抑止され(stambha)、視覚(cakṣus)の照明(prakāśa)との非結合(asamprayoga)がある時に、隠失がある。」(Ys III-21)「身体の形体への総制に基づいて、[その身体の]形体の、所取能力を、抑止する(pratibadhnāti)、[したがって]所取能力の抑止がある時に、視覚の照明との非結合があるので、隠失が、ヨーガ行者に、生起する。そのことによって、音声等の隠失[も]、言われていると知られるべきである。」(VYs III-21)と。<14>

{ity aṣṭa-vidham aiśvaraṃ balaṃ yoginām śuddha-sattva-samādhitaḥ tat sarvvaṃ upajāyata} iti // <15>(GCs IV-1-140 ~ 141:pp.1852-1855)

「以上の、8種類が、ヨーガ行者たちにとっての、自在的な力と、称される。清浄な、サットヴァ[を有するもの]の、三昧に基づいて、その[自在的な力の、]一切が、生じるのである。」(Cs IV-1-141)と。<15>

以上のCsに対する註釈GCsの記述(iii)の通り、Csにおける、いわゆる「ヨーガ行者の8種類の自在力」が、パタンジャリ Patañjaliのヨーガ教学(Yogaśāstra)、すなわちPatañjaliの『ヨーガスートラ』Yogasūtra(Ys)とそれに対するヴィヤーサ Vyāsaの『ヨーガスートラ註解』(VYs)の記述との関連の下に明確に論じられているのである。

【GCsによる、成就力23分類法】

《5小成就力》

- ① 三時知者性(trikāla-jñatva)
- ② 非相対者性 (advandva)
- ③ 他心等知者性(paracitta-ādi-abhijñatā)
- ④ 強靱性 (stambha)
- ⑤ 不屈性(aparājaya)

《10徳主成就力》

- ① 静穏性(an-ūrmivattva)
- ② 遠隔聴・視力(dūra-śravaṇa-darśana)
- ③ 意迅速性(mano-javi-tva)
- ④ 如意体性(kāma-rūpa)
- ⑤ 他身入(para-kāya-praveśa)
- ⑥ 自欲偽死 (svecchā-mṛtyu)
- ⑦ 神戯随見 (deva-kriḍā-anudarśana)
- ⑧ 如意成就力(yathā-saṅkalpa-siddhi)
- ⑨ 命令成就力(ājñā-siddhi)
- ⑩ 自在進行(avyāhata-gati)

《8 梵主成就力—後出 VYs における自在力 8 分類タイプB》

- ① 微細さ(aṇiman)
- ② 大いさ(mahiman)
- ③ 軽さ(laghiman)
- ④ 到達(prāpti)
- ⑤ 楽欲(prākāmya)
- ⑥ 支配者性(iśitva)
- ⑦ 統治者性(vasitva)
- ⑧ 欲望止住者性 (kāma-avaśāyitā[-avasāyitā])

インドの「超能力」というと、直ちに、この Patañjali のヨーガ教学が引き合いに出されるのが、常である。だが、Patañjali のヨーガ教学における「超能力」の取扱も整然と組織されたものではないことも、既に大方の認めるところである。「YS 第三章は「自在品」(vibhūti-pāda)と称せられ、そこには特定の

行法(sam̐yama)による神通力の獲得が雑然と列挙されている。」との原実博士の指摘にも明らかな通り、現行 Ys には、「8 種類の自在力」の類いの、超能力に対する整理・分類の意識は明確ではないのである。Patañjali の現行ヨーガ教学の成立の複雑な事情とも関連する問題であろうと、容易に想像されるが、筆者のここでの関心は、この自在力の整理・分類の歴史的推移を可能な限り、詳細に、文献に即して論究することである。

だが、Patañjali のヨーガ教学の記述に参究する前に、Cs と並び称されるインドの伝統的医学書『スシュルタ本集』Suśruta-saṁhitā(Ss)に触れられる、この「8 種の自在力」について一瞥しておきたい。

(iv) aṁśumantaṁ sauvarṇe pātre<sup>^</sup>abhiṣuṇyāt, candramasaṁ rājate; tāv upayujya<sup>^</sup>asta-guṇam aiśvaryam avāpya<sup>^</sup>iśānaṁ devam anupraviśati, śeṣāṁs tu tāma-maye mṛn-maye vā rohite vā carmaṇi vitate; sūdra-varjaṁ tribhir varṇaiḥ somā upayoktavayāḥ / tataś caturthe māse paurṇamāsyāṁ śucau deśe brāhmaṇān arcayitvā kṛta-maṅgalo niṣkramya yathā-uktaṁ vrajed iti //13//(Ss IV-29-13 :p.504)

(4)「アンシュマット」を、金の(sauvarṇa)容器(pātra)に、集めるべきである(abhiṣuṇyāt)。「チャンドラマス」を、銀の(rājata) [容器に、集めるべきである]。その両者を服用するならば(upayujya)、8 種類の(asta-guṇa)自在力(aiśvaryam)を、得た後に、自在主(iśāna)たる神(deva)に、随入する。しかるに、[アンシュマット、チャンドラマスの他の=] 残余(śeṣa) [の種類]のソーマを、銅製(tāma-maya)かまたは土製の[容器]か、または赤色の(rohita)鞆し(vitata)革(carman)に [集めるべきである]。ソーマは、シュードラを除く、[上位] 3 [階級] の種姓たちによって、服用されるべきである。そして、第 4(caturtha)月(māsa)、満月の日(paurṇamāsi)、清らかな (śuci)場所(deśa)において、パラモンたちを、称賛した後に、祝詞を為して、出離して、言われた通りに、遊行すべきである。と。

(v) asta-vidha-aiśvaryam yathā—{animā laghimā prāptiḥ prakāmyaṁ mahimā tathā / iśitvaṁ ca vaśitvaṁ ca tathā kāma-avasāyitā}(Ys III-45)—iti; etad asta-guṇam aiśvaryam yoga-labhyaṁ api soma-rasāyanāl labhyate / carake punar anyathā<sup>^</sup>uktaṁ—{āveśāś cetaso jñānam arthānām chandataḥ kriyā / dr̥ṣṭiḥ śrotraṁ smṛtiḥ kāntir iṣṭataś ca<sup>^</sup>apy adarśanam // ity aṣṭa-guṇam ākhyātam yogināṁ balam aiśvaram / śuddha-sattva-samādhānāt tat sarvam upavartate }



(Cs IV-1-140 ~ 142) - iti / iśānaṃ maheśvaram / (DSs IV-29-13:p.504)

(5) 8種類の自在力がある、『ヨーガストラ註解』に「①微細さ(aṇiman)、②軽さ(laghiman)、③到達(prāpti)、④楽欲(prākāmya)、同じく⑤大いさ(mahiman)、また、⑥支配者性(iśitva)、また、⑦統治者性(vaśitva)、同じく⑧欲望住者性(kāma-avasāyitā)」と、[言う]ように。この、ヨーガによって獲得されるものである、**8種類の(aṣṭa-guṇa)、自在力(aiśvarya)**は、また、ソーマ靈薬(soma-rasāyana)に基づいて、得られるのである。『チャラカ本集』においては、また、別様に、言われている。「[身体等への] ①入(āveśa)、[他者の] 心(cetas)の②知(jñāna)、諸対象物(artha)に対する欲求のままなる(chandatas)③行為(kriyā)、④[超]視(dṛṣṭi)、⑤[超]聴(śrotra)、⑥[前世]想起(smṛti)、⑦[超]魅力(kānti)、そしてさらに、恣意的(iśṭatas) ⑧不見(adarśana)、以上の、8種類(aṣṭa-guṇa)が、ヨーガ行者たちにとっての、自在的な[超]力と、称される。清浄な、サットヴァ[を有するもの]の、三昧(samādhāna)に基づいて、その[自在的超力の、]一切が、発動するのである。」

(iv) に見るように、Cs と並び称される Ss においてもまた「8種類の自在力」が話題になっているのである。そして、それに対するダルハナ Ḍalhaṇa の註釈『ニバンダサングラハ』 Nibandhasaṃgraha(DSs)の記述(v)においては、ヨーガ教学における「8種類の自在力」と『チャラカ本集』における「8種類の自在力」が対比されているのである。さらに、問題の自在力が、Cs の(i)の場合とは異なって、「三昧」によってではなく、「ソーマ靈薬」の摂取によって実現されると記されている点に注意しておくべきだろう。

【DSs による、VYs の自在力8分類—タイプB】

【Tvai による理由付け】

- |                  |            |
|------------------|------------|
| ① 微細さ(aṇiman)    | 粗大なるものへの総制 |
| ② 軽さ(laghiman)   | 粗大なるものへの総制 |
| ③ 大いさ(mahiman)   | 粗大なるものへの総制 |
| ④ 到達(prāpti)     | 粗大なるものへの総制 |
| ⑤ 楽欲(prākāmya)   | 自体への総制     |
| ⑥ 統治者性(vaśitva)  | 微小なる対象への総制 |
| ⑦ 支配者性(iśitṛtva) | 随行の対象への総制  |

## ⑧ 欲望場止住者性(yatra-kāma-avasāyitva) 有目的性への総制

さらに、ヨーガ教学そのものの「8種類の自在力」の記述に参入する前に、今日もなお哲学用語辞典として重宝される『ニヤーヤコーシャ』Nyāyakośa(Nk)の siddhi 成就力の項目を見ておきたい。

(vi) yoga-śāstra-jñās tu aiśvaryam / atra sūtrāṇi {te samādhāv upasargā vyutthāne siddhayaḥ} (Pāta.Pā.3 sū.37) {janma-oṣadhi-mantra-tapaḥ-samādhi-jāḥ siddhayaḥ} (Pāta.Pā.4 sū.1) ity ādini / tad-arthaś ca {te pratibhā-ādayaḥ} siddhayaḥ {samāhita-cittasya<sup>u</sup>tpadyamānā upasargāḥ} vighnāḥ / {tattva-darśana-pratyanikatvān / vyutthita-cittasya<sup>u</sup>tpadyamānāḥ siddhayaḥ} priyāḥ (Bhāṣya.) iti / tatra janmanā siddhir yathā yakṣa-gandharva-ādinām ākāśa-gamana-ādi-siddhiḥ / devahūti-putra-kapila-ādinām tu svābhāviki siddhiḥ / oṣadhibhiḥ asura-bhavane māṇḍavya-ādi-muninām rasāyanena ity evam-ādiḥ / mantrair aṇima-ādi-lābhāḥ keṣām cit / tapasā viśvāmītra-ādinām siddhiḥ / saṃkalpa-siddhiḥ kāma-rūpī yatra tatra kāma-gaḥ ity evam-ādiḥ / samādhi-jāḥ siddhayaḥ tu parama-aṇv-ādi-mūla-prakṛty-anta-vastūnām sāksātkārah {ṛtaṃbhara-ākhyā-adhyātma-prasādaś} ca ity ādayaḥ (Pāta.1-47 ~ 48) / astau siddhayaḥ tu aṇimā mahimā laghimā garimā prāptiḥ prākāmyam vaśitvam īsitvam ca<sup>u</sup>iti / tatra bhūta-jayena<sup>u</sup>aṇimā-ādy-astau-siddhayaḥ prāpnuvanti / tatra aṇimā parama-aṇvat sūkṣma-svarūpeṇa<sup>u</sup>avasthānam / mahimā vibhutva-prāptiḥ / laghimā kārṇāsaval laghutva-bhavanam / garimā meru-parvatavad gurutva-bhavanam / prāptiḥ aṅgulyā candra-maṇḍala-sparśanam / prākāmyam satya-saṃkalpatvam / vaśitvam sarva-prāṇi-niyantṛtvam / īsitvam ca sarva-bhūta-utpādana-śaktimattvam (Pāta.3-45) iti / (Nk,pp.1021-1022)

(6) しかるに、ヨーガ教学に通じている者たちは、[siddhi 成就/成就力を、] 自在力 [のこと] である [という。] これに関しては、「それら [諸知覚] は、三昧時には、障碍であり、出定時には、成就力である。」(Ys III-37) 「諸成就力は、誕生・薬草・真言・苦行・三昧より生じる。」(Ys IV-1)等のスートラがある。そして、その意味は「ヴィヤーサによれば、以下の通りである。」「三昧せる心を有する者に、生起する、それら、観照(pratibhā)等《の諸成就力》は、障碍《、すなわち、妨げ》である。《真実を》見ることに對する敵対者であるが故に。出定せる心を有する者に、生起する、

諸成就力は、好ましいものである。」(VYs III-37)と。その場合、誕生による成就力とは、夜叉(yakṣa)・乾闥婆等(gandharva)の、虚空進行(ākāśa-gamana)等の成就力のようなものである。しかるに、デーヴァフーティー(devahūti)の息子のカピラ等には、生来の(svābhāvika)成就力(siddhi)がある。葉草によって、[というのは] アスラ世界において、マーンダヴィヤ等の聖者たちに、靈薬によって、[そうした自在力が生起する] といったようなもの等である。諸真言によって、或る者たちに、「微細」等の獲得があるのである。苦行によって、ヴィシュヴァーミトラ等に、成就力が[生起する]のである。ある事柄に関する、慾という体を取る決意に基づく成就力がある、その事柄に関して、慾のままなる進行がある、といったようなもの等である。一方、三昧に基づいて生じた、成就力は、極微を初めとし、根本原質に到る諸実在を直証するものであり、さらに、「真理保持」と称する「内的澄明」である、といったもの等である。一方、①微細さ(aṇiman)、②大いさ(mahiman)、③軽さ(laghiman)、④重さ(gariman)、⑤到達(prāpti)、⑥楽欲(prākāmya)、⑦統治者性(vaśitva)、そして、⑧支配者性(iśitva)というのが、8つの成就力である。その場合、元素への征服によって、微細さの8つの成就力が、実現するのである。そのうち、①微細さとは、極微のように、微小な自体としての定立である。②大いさとは、遍在者性の獲得である。③軽さとは、綿のように、軽性の住居である。④重さとは、メール山のように、重性の住居である。⑤到達とは、指による、月輪への接触である。⑥楽欲とは、真実の決意性である。⑦統治者性とは、一切の生命体に対する制御者性である。そして、⑧支配者性とは、一切の元素の生起に対する可能者性である。

このNkの記述(vi)より、先に紹介されたタイプBの変形、タイプB'のあることが知れる。また、(iv)(v)で言及された、超能力獲得の手段として、Ys IV-1を典拠に、「誕生」「葉草」「呪文」「三昧」のあることが明確に指摘されている点である。解脱を目的とする種々宗教・哲学大系の変遷にあって、「超能力」のその大系に果たす役割にも大きな変化が見られるという歴史的事実とも関連する問題であろう。

[Nkにおける自在力8分類-タイプB']

- ① 微細さ(aṇiman)、
- ② 大いさ(mahiman)

- ③ 軽さ(laghiman)
- ④ 重さ(gariman)
- ⑤ 到達(prāpti)
- ⑥ 楽欲(prākāmya)
- ⑦ 統治者性(vasitva)
- ⑧ 支配者性(iśitva)

## II. ヨーガ教学の自在力

本節では、Cs に対する註記などにも、典拠とされた Ys 等における「自在力」について見てみたいが、Ys には、「8 種類の自在力」の類の整理・分類の意図を直接的に示す文言は一切見られないこと、それが現れるのは、Vyāsa の註解 VYs においてであることを確認した上で、まずは、現行ヨーガ教学の冒頭部を一瞥しておきたい。「超能力」と深く関わりのある重要な概念である「三昧」(samādhi)と、ヨーガyogaの関係を確認しておくためである。

(vii) {atha yoga-anuśāsanam //1//}

atha<sup>ˆ</sup>ity ayam adhikāra-arthaḥ / yoga-anuśāsanam śāstram adhikṛtaṃ veditavyam / yogaḥ samādhiḥ / sa ca sārva-bhaumaś cittasya dharmah / kṣiptam mūḍham vikṣiptam ekāgraṃ niruddham iti citta-bhūmayah / tatra vikṣipte cetasi vikṣepa-upasarjanībhūtaḥ samādhir na yoga-pakṣe vartate / yas tv ekāgre cetasi sad-bhūtam arthaṃ pradyotayati kṣiṇoti ca kleśān karma-bandhanāni ślathayati nirodham abhimukhaṃ karoti sa samprajñāto yoga ity ākhyāyate / sa ca vitarka-anugato vicāra-anugata ānanda-anugato<sup>ˆ</sup>asmitā-anugata ity upariṣṭān nivedayiṣyāmah / sarva-vṛtti-nirodhe tv asaṃprajñātaḥ samādhiḥ //1// <1>

(7) 《さて(atha)、ヨーガ(yoga)の随説(anuśāsa)が [開始される。]》(Ys I -1)  
 「さて(atha)」というこの [語] は、「主題提示(adhikāra)」の意味を持つ。  
 「ヨーガの随説(yoga-anuśāsa)」という教学が、提示された主題であると知られるべきである。「ヨーガ」は、三昧(samādhi)である。そして、その [三昧] とは、一切地に関わる、心(citta)の、属性(dharma)である。「散乱 [状態] (kṣipta)」「蒙昧 [状態] (mūḍha)」「離散乱 [状態] (vikṣipta)」「専注 [状態] (ekāgra)」「止滅 [状態] (niruddha)」というのが、心地(citta-bhūmi) というものである。そのうち、心(cetas)が散乱している(vikṣipta)時、三昧は、散乱に支配されているので、ヨーガの圏内に存することはない。しか

るに、心が専注している時、真実在(sad-bhūta)の対象物を照明し、そして、諸煩惱(kleśa)を滅し、諸々の業の繫縛(karma-bandhana)を解き放ち、止滅(nirodha)に向かわしめる〔ものであるが故に、〕それは、有識の〔＝識別状態にある〕(samprajñāta)ヨーガである、と言われる。そして、その〔有識のヨーガ〕は、粗い思考〔＝尋〕(vitarka)に遵じたもの、精細な思考〔＝伺〕(vicāra)に遵じたもの、歓喜(ānanda)に遵じたもの、自己存在性(asmitā)に遵じたものがある、と後にわれわれが教示するであろう。しかるに、一切の作用の止滅がある時、〔それは、〕無識の〔＝識別状態にはない〕(asamprajñāta)三昧である。<1>

tasya lakṣaṇa-abhidhitasya<sup>ā</sup>idaṃ sūtraṃ pravavṛte /

{yogaś citta-vṛtti-nirodhaḥ //2//}

sarva-śabda-agrahaṇāt samprajñāto<sup>ā</sup>api yoga ity ākhyāyate / cittaṃ hi prakhyā-pravṛtti-sthiti-śīlatvāt tri-guṇam / prakhyā-rūpaṃ hi citta-sattvaṃ rajas-tamobhyāṃ saṃsr̥ṣṭam aiśvarya-viśaya-priyaṃ bhavati / tad eva tamaś<sup>ā</sup>anuviddham adharma-ajñāna-avairāgya-anaiśvarya-upagaṃ bhavati / tad eva prakṣiṇa-moha-āvaraṇaṃ sarvataḥ pradyotamānam anuviddham rajo-mātrayā dharma-jñāna-vairāgya-aiśvarya-upagaṃ bhavati / tad eva rajo-leśa-mala-apetaṃ svarūpa-pratiṣṭhaṃ sattva-puruṣa-anya-tā- khyāti-mātraṃ dharma-megha-dhyāna-upagaṃ bhavati / tat paraṃ prasamkhyānam ity ācakṣate dhyāyinaḥ /citi-śaktir aparīṇāminy apratisamkramā darśita-viśayā śuddhā ca<sup>ā</sup>nantā ca sattva-guṇa-ātmikā ca<sup>ī</sup>yam ato viparītā viveka-khyātir iti / atas tasyām viraktam cittaṃ tām api khyātiṃ niruṇaddhi / tad-avasthaṃ cittaṃ saṃskāra-upagaṃ bhavati sa nirbijah samādhiḥ / na tatra kiṃ-cit samprajñāyata ity asamprajñātaḥ / dvididhaḥ sa yogaś citta-vṛtti-nirodha ity //2// <2>

その〔主題であるヨーガの〕定義を表示せんとして、この〔第2番目の〕ストロアが発せられたのである。

《ヨーガとは、心作用(citta-vṛtti)の止滅(nirodha)である。》(Ys I-2)

「一切の(sarva)」という語が使われていないが故に、有識の〔三昧〕もまた、ヨーガである、と言われるのである。実に、心(citta)は、聡明(prakhyā)・活動(pravṛtti)・滞留(sthiti)を性根(śīla)とするものであるが故に、トリ・グナ三徳からなる。なぜならば、心(citta)のサットヴァは、聡明を体とするものであり、ラジャス・タマスの両者と創合して、自在力の対象を好む

ものとなるのであるから。他ならぬその〔心のサットヴァ〕が、タマスによって、覆われたならば、不善(adharma)・無知(ajñāna)・不離欲(avairāgya)・不自在力(anaiśvarya)に親近する(upaga)ことに、なるのである。他ならぬ、その〔ラジャス・タマスに創合した、心のサットヴァ〕が、迷妄(moha)という覆い(āvaraṇa)が滅尽して、一切処を、照明しつつあり、ラジャスのみによって覆われたならば、善(dharma)・知(jāna)・離欲(vairāgya)・自在力(aiśvarya)に親近するものとなるのである。その〔ラジャスのみによって覆われた心のサットヴァ〕が、ラジャスの一片の汚れ(mala)が除去されたならば、自体に安立し、サットヴァ〔たるマナス〕とプルシャの別異性(anyatā)の知(khyāti)のみとなり、法雲禪定(dharma-megha-dhyāna)に、親近することになるのである。「それは、最高の(para)プラサンキヤーナ瞑想(prasaṃkhyāna)である」と禪定者たちは、主張する。精神力(citi-śakti)は、変転することなく(a-pariṇāminī)、移動することなく(a-pratisaṃkrama)、見せられた(darśita)対象を持ち、しかも清浄にして、無限である。そして、サットヴァというグナよりなる、この、識別知(viveka-khyāti)は、この〔精神力〕とは、反対のものである、と。この故に、その〔精神力〕に、染められない、心は、その〔識別の〕知をも、止滅させるのである。その〔精神力に染められない状態に〕ある、心は、潜在力(samskāra)に親近することになるのである。それが、無種子(nirbīja)三昧である。その場合は、なにもものも、識別されることはないのである。したがって、無識の(asamprajñāta)〔ヨーガ〕である。心作用の止滅(nirodha)である、かのヨーガは、二種類である、と。<2>

以上が、Patañjali のヨーガ教学、すなわち Ys とそれに対する Vyāsa の VYs の冒頭部である。ヨーガの体系に対する概論の体をなすものであり、極めて難解なものであるが、取り敢えずは、「心作用の止滅／抑制」とされるヨーガは、三昧であるが、三昧は必ずしもヨーガではないことを確認しておきたい。また、前節の(vi)で引かれた Ys IV-1 に明らかなように、「超能力は三昧によって生じる」ものであるが、三昧によらずとも、「誕生や薬草や真言や苦行」によっても生じるものであることも、しっかりと想起しておきたい。

さて、先ずは Ys II-43 に注目したい。苦行によって、不浄が滅する結果、身体と器官の成就力が生じると明確に述べている。

(viii) kāya-indriya-siddhir aśuddhi-kṣayāt tapasaḥ //43//

nirvartyamānam eva tapo hinasty aśuddhy-āvaraṇa-malam / tad-āvaraṇa-mala-apagamāt  
kāya-siddhir aṇima-ādyā / tathā<sup>ˆ</sup>indriya-siddhir dūrāc chravaṇa-darśana-ādyā<sup>ˆ</sup>iti  
//43//

(8) 《苦行に基づく、不浄(aśuddhi)の断滅(kṣaya)より、身体(kāya)・器官(indriya)の成就力(siddhi)が[生じるので]ある。》(Ys II-43)

他ならぬ完成されつつある、苦行は、不浄(aśuddhi)という覆うもの(āvaraṇa)である汚れ(mala)を、破するのである。その、覆うものである汚れの消去(apagama)に基づいて、「微細さ(aṇiman)」等の、身体(kāya)の成就力が[生じるので]ある。同様に、遠隔(dūrāt)聴取(śravaṇa)・視見(darśana)等の、器官(indriya)の成就力が、[生じるので]ある、と[という意味で]ある。

「身体の成就力」に配当される「微細さ等」は、(v)(vi)からも知られる通り、以下の(ix)にある、Ys III-45を踏まえたものであり、Vyāsaによる註解 VYs III-45の中に明確に、「8つの自在力」として言及されるところのもので、「自在力8分類—タイプB」である。

(ix) {tato<sup>ˆ</sup>aṇimā-ādi-prādurbhāvaḥ kāya-sampat tad-dharma-anabhighātaś ca //45//} tato<sup>ˆ</sup>aṇima-ādi-prādurbhāvaḥ kāya-sampat tad-dharma-anabhighātaś ca / tatra<sup>ˆ</sup>aṇimā bhavaty aṇuḥ / laghimā laghur bhavati / mahimā mahān bhavati / prāptir aṅguly-agreṇa<sup>ˆ</sup>api sprśati candramasam / prākāmyam icchā-anabhighātaḥ / bhūmāv unmajjati nimajjati yathā<sup>ˆ</sup>udake / vaśitvaṃ bhūta-bhautikeṣu vaśibhavaty avaśyaś ca<sup>ˆ</sup>anyeṣām/iśitṛtvaṃ teṣāṃ prabhava-apyaya-vyūhānām iṣṭe /yatra-kāma-avasāyitvaṃ satya-saṅkalpatā yathā saṅkalpas tathā bhūta-prakṛtīnām avasthānam / na ca śakto<sup>ˆ</sup>api pada-artha-viparyāsaṃ karoti / kasmāt ? anyasya yatra-kāma-avasāyinaḥ pūrva-siddhasya tathā bhūteṣu saṅkalpād iti / etāny astāv aiśvaryāni / kāya-sampad vakṣyamāṇā tad-dharma-anabhighātaś ca pṛthvī mūrtyā na niruṇaddhi yoginaḥ śarīta-ādi-kriyām śīlām apy anuvisāti<sup>ˆ</sup>iti / na<sup>ˆ</sup>āpaḥ snigdhaḥ kledayanti / na<sup>ˆ</sup>agnir uṣṇo dahati / na vāyuh praṇāmī vahaty anāvaraṇa-ātmake<sup>ˆ</sup>apy ākāśe bhavaty āvrta-kāyaḥ siddhānām apy adṛśyo bhavati //45//

(9) 《それ故に、微細さ(aṇiman)等の発現(prādurbhāva)、身体の完成(kāya-sampad)が、そして、その[身体の]属性(dharma)の非損(anabhighāta)が、ある。》(Ys III-45) そのうち、①微細さとは、[その者が、]微(aṇu)に

なる。②軽さ(laghiman)とは、[その者が] 軽く(laghu)なる。③大いさ(mahiman)とは、[その者が] 大きく(mahat)なる。④到達(prāpti)とは、[その者が] 指先(aṅguly-agra)によってでも、月に(candramasa)接触する(spr̥ṣati)。⑤楽欲(prākāmya)とは、欲求(iicchā)の非損(anabhighāta)である。[すなわち、その者が] 水におけるように、地において、浮かび、沈むのである。⑥統治者性(vasītvā)とは、[その者が] 諸々の元素(bhūta)と元素よりなるもの(bhautika)を、統治し(vasībhavati)、そして、他者たちにとって、統治されざる者(avaśya) [となる]。⑦支配者性(iśitṛtvā)とは、それら [元素・元素よりなるもの] の、発生(prabhava)・消滅(apyaya)・配置(vyūha)を、支配する(iṣṭe)。⑧欲望場止住者性(yatra-kāma-avasāyitva)とは、真実(satya)の思惟性(samkalpatā)である。思惟(samkalpa)がある如く、諸々の元素・原質の、止住がある。しかしながら、能力のある者も、事物の顛倒を、作為することはないのである。何故か？ 欲望場止住者たる、別の、以前の成就者には、そのような、諸元素に関する、思惟が存するが故に。という、それらが、**8つの、自在力**である。「身体の完成」は、[次のスートラで] 述べられるであろう。そして、「そ[の身体]の属性の非損」とは、[以下のようなことである。] ①地は、[その] 形(mūrti)によって、ヨーガ行者の、身体等の行為を、妨げないのである。[ヨーガ行者は] 石にも、随入するのである、から。[また] ②ぬるぬるした(snigdha)水が、[ヨーガ行者を] 濡らすことはないし、③熱い、火が、[ヨーガ行者を] 焼くことはないし、④靡かせる風が、[ヨーガ行者を] 吹き飛ばすことはないし、⑤虚空が、非覆を本性としているとしても、[ヨーガ行者は] 身体を覆う者(āvṛta-kāya)であるし、諸成就者(siddha)たちに対しても、非被見者(adṛśya)である、[から]。

自在力=成就是、Ys II-43のVyāsa註(viii)に見るとおり、「身体的成就是」と「器官的成就是」に分類されていた。そして、前者に「微細さ」等が配当され、後者には、Csに見た分類法の中に包摂される「[超]視・[超]聴」が配当されていた。だが、現行Ys、VYsには、「超能力」と呼び得る数多くの能力が言及されている。だが、先にも述べた通り、それらの「超能力」に対する整理・分類の意識は必ずしも明確ではないのである。その点を改めて確認し、VyāsaによるVYsにおいて図らずも言挙げされた「8種類の自在力」を、VYs



に対する2種類の復註の記述で補っておきたい。

(x) はシャンカラ Śaṅkara に帰される復註 Vivaraṇa(Vi)、(xi)はヴァーチャスパティ Vācaspati の復註 Tattvavaiśārādī(Tvai)である。特に、Viの(x)によって、その8種類の自在力が、「諸元素の征服によるものである」と明記されている点、Tvaiの(xi)の記述によって、その8種類の自在力が、単に列挙されるだけではなしに、その由来する「総制」に応じて、さらなる分類がなされているという点に注目したい。

(x) samyama-phalam idānim āha —{tato^anīma-ādi-prādurbhāvaḥ kāya-sampad tad-dharma-anabhighātaś ca} / {tatra^anīmā} ko {bhavati} ity āha —{aṇuḥ} iti / sūkṣmād api sūkṣmataro bhavati^icchataḥ / tena^anīmā sarvam anupraviśati vajram api / tathā sarvasya^adrśyo bhavati //<1>

(10) 総制(samyama)の結果(phala)を、今や、述べる。「それ故に、微細さ(anīman)等の発現(prādurbhāva)、身体の完成(kāya-sampad)が、そして、その〔身体〕属性(dharma)の非損(anabhighāta)が、ある。」(45) そのうち「①微細さ(anīman)」とは、いかなるものであるか? というので、述べる。「微」と。欲求に基づいて(icchātas)、微小なもの(sūkṣma)よりも、より微小に(sūkṣmatara)なる。〔ヨーガ行者は、〕その、微細さ(anīman)によって、一切に、随入する(anupraviśati)、金剛(vajra)にも。同様に、一切にあって、非被見者(adrśya)と、なる。<1>

{laghimā — laghuḥ} laghubhyaḥ tūla-ādibhyo^api laghutaraḥ bhavati / tena nirāmbanaḥ sarvato gantum paryāpnoti / {mahimā — mahān bhavati} / ākāśam api vyāpnoti / {prāptiḥ} — iha-stha eva {aṅguly-agreṇa^api sprśati candramasam} / {prākāmyam} — pracura-kāmo yathā-iṣṭa-kāmo bhavati {icchā-anabhighātaḥ} / {bhūmāv unmajjati nimajjati} ca yathā-kāmatvāt {yathā^udake} //<2>

「②軽さとは、軽く〔なる〕。」軽いものである(laghu)、綿(tūla)等よりも、より軽く(laghutara)なるのである。その〔軽さ〕によって、所依がなくなつて(nirāmbana)、一切処に赴かんとして、到達するのである。「③大きさ(mahiman)とは、大きくなる。」虚空をも、遍充する。「④到達(prāpti)」とは、他ならぬ、此の〔世に〕住する者が、「指先(aṅguly-agra)によってでも、月に接触する、ということである。」「⑤楽欲(prākāmya)」とは、多なる欲望、欲せられたるままの欲望であり、「欲求(icchā)の非損(anabhighāta)、ということである。」「すなわち〕欲望のままなるが故に、「水(udaka)にお

けるように、地(bhūmi)において、浮かび(unmajjati)、そして、沈む(nimajjati)のである。」

<2>

{vaśitvam}—sarva-loka-vaśitvam / asya vyākhyānam {bhūta-bhautika}-vaśi bhavati avaśyaś ca^anyeṣām / {īśitvam — teṣām} bhūtānām {prabhava-vyūha-apyayānām} utpatti-sthiti-pralayānām iṣṭe / {yatra-kāma-avasāyitvam}—yasmin kāmas tatra^eva tad-avasānam tad-antam gacchati / {satya-saṃkalpād} dhetoḥ {yathā saṃkalpaḥ tathā bhūta-prakṛtīnām avasthānam} bhavati //<3>

「⑥統治者性(vaśitva)」とは、一切世界の統治者性、このことを、意味しているのである。「元素(bhūta)と元素よりなるもの(bhautika)」に対する統治者(vaśin)、であって、しかも、他者たちにとっての、被統治者ではない(avaśya)、ということである。「⑦支配者性(īśitva)とは、それら」諸元素の、「発生(prabhava)・配置(vyūha)・消滅(apyaya)を」、[すなわち] 生起・持続・帰滅を、「支配する(iṣṭe)」ということである。「⑧欲望場止住者性(yatra-kāma-avasāyitva)」とは、そのものに対して欲望のある、まさしく、そこにおいて、その[欲望の]止住、[すなわち]その[欲望の]終焉(anta)に、赴く、ということである。「真実の(satya)思惟(saṃkalpa)」という原因に基づいて、[つまり]「思惟がある如く、諸々の元素(bhūta)・原因(prakṛti)の、止住が」生じる、ということである。<3>

{śakto^api sa yogī na pada-artha-viparyāsam karoti} / na^agnim śītīkaroti / {kasmāt ? anyasya yatra-kāma-avasāyinaḥ pūrva-siddhasya} parameśvarasya tathā teṣu pada-artheṣu viparyāseṇa {saṃkalpāt} / na hi pada-artha-viparyāsam cikīrṣamāṇasya pūrva-siddham prati vinā dveṣeṇa tad-viparyāso bhavati / tad-aśuddhy-abhāvād eva na pada-artha-viparyāsam karoti / kalyāṇatara-ācaraṇo hi sa iti / etāny aṣṭau aṇimā-ādy-aiśvaryaṇi bhūta-jayād bhavati //<4>

「能力があるとしても、かのヨーガ行者は、事物の顛倒を、作為することはないのである。」[つまり] 火を、冷化する(śītīkaroti)ことはないのである。「何故か? 欲望場止住者(yatra-kāma-avasāyin)たる、別の、以前の成就者」、[すなわち] 最高自在者(parameśvara)には、「そのような、それら、諸事物に関する」、顛倒による、「思惟が存するが故に。」 実に、事物の顛倒を為さんと欲する者には、以前の成就者に対する羨望なしに、その[事

物の] 顛倒が、あることはないのである。まさしく、その[ヨーガ行者には] 不浄(aśuddhi)がないが故に、事物(pada-artha)の顛倒を、作為することはないのである。なぜならば、かの[ヨーガ行者]は、きわめて正しい行為を有する者であるから、ということである。以上の、8つの、微細さ(animan)等の自在力が、諸元素(bhūta)の征服(jaya)に基づいて、生じるのである。

<4>

{kāya-sampad vakṣyamānā / tad-dharma-anabhighātaḥ} teṣāṃ bhūtānāṃ dharmaiḥ na yoginō'abhighāto bhavati / {pṛthivī} svena dharmeṇa {mūrtyā} na viruṇaddhi {yoginaḥ śārīra-ādi-kriyām} / katham? {śīlām apy anupraviśati} / {na'apāḥ snigdḥā} yoginaṃ {kledayanti} varṣa-sahasram apy udake tiṣṭhantam / {na'agnir uṣṇo dahati / na vāyuh praṇāmi vahati / anāvarena-ātmakē'api} prakāṣa-rūpe'api bhavaty āvṛtaḥ prakāṣo na bhavati / {siddhānām apy adṛśya bhavati} //45//<5>(Vi ad VYs II-45)

「身体(kāya)の完成(sampad)」は、[次のストロアで] 述べられるであろう。そ[れら、諸元素]の[諸]属性による非損」とは、ヨーガ行者には、それら、諸元素の、諸属性による、損壊が、生じることはないのである。「地は」、自らの属性、[すなわち][その]形(mūrti)によって、ヨーガ行者の、身体等の行為を、妨げないのである。いかにしてか? 「[ヨーガ行者は] 石にも、随入する」。「ぬるぬるした水が」、1000年に亘ってであれ、水中に立てる、ヨーガ行者を「濡らすことはない」のである。「熱い、火が、[ヨーガ行者を] 焼くことはないし、靡かせる風が、[ヨーガ行者を] 吹き飛ばすことはないし、[虚空が、] 非覆を本性としているとしても、[すなわち] 明顕という体(rūpa)を持つとしても、[ヨーガ行者は、] 覆われている、[すなわち] 明顕ではないし、「諸成就者たちに対しても、非被見者(adṛśya)である」<5>

(xi) saṃkalpa-anuvidhāne bhūtānāṃ kiṃ yoginaḥ sidhyati'ity ata āha — {tato'ānima-ādi-prādurbhāvaḥ kāya-sampat tad-dharma-anabhighātaś ca} /<1>

(11) 諸元素(bhūta)が、思惟に随順したならば、ヨーガ行者に、なにか、成就するのであるか? という、このこと故に、述べる。「それ故に、微細さ(añiman)等の発現(prādurbhāva)が、身体の完成(kāya-sampad)が、そして、その属性(dharma)による非損(anabhighāta)が、ある。」<1>

sthūla-samyama-jayāc catasrah siddhayo bhavanti<sup>ˆ</sup>ity āha — tatra<sup>ˆ</sup>{aṇimā} mahān api bhavaty aṇuḥ / {laghimā} mahān api laghur bhūtvā<sup>ˆ</sup>iṣikā-tūla iva<sup>ˆ</sup>ākāśe viharati / {mahimā}<sup>ˆ</sup>alpo<sup>ˆ</sup>api grāma-naga-gagana-parimāṇo bhavati / {prāptih} sarve bhāvāḥ saṁnihitā bhavanti yoginaḥ / tad yathā bhūmi-ṣṭha eva<sup>ˆ</sup> {aṅguly-agreṇa spr̥ṣati candramasam} / <2>

《1》粗大なるもの(sthūla)への総制(samyama)という征服(jaya)に基づいて、4つの成就力が生じる、と述べる。そのうち、「①微細さ」とは、[それによって]大なるもの(mahat)も、微となる。「②軽さ」とは、[それによって]大なるものも、軽く(laghu)なった後に、葦(ikṣikā)・綿(tūla)の如く、虚空を、逍遙する。「③大いさ」とは、[それによって]小なるものも、城・山・空の大きさを持つものとなる。「④到達」とは、[それによって]一切の存在物が、ヨーガ行者にとって、近接したものとなる。すなわち、他ならぬ、地に立てる者が、「指先によって、月に接触する」のである。<2> svarūpa-samyama-vijayāt siddhim āha — {prākāmyam icchā-anabhighātaḥ} / na<sup>ˆ</sup>asya rūpaṃ bhūta-svarūpair mūrty-ādibhir hanyate / {bhūmāv unmajjati nimajjati ca yathā<sup>ˆ</sup>udake} / <3>

《2》自体 (svarūpa)への総制という征服に基づいて、[生じる]成就力を、述べる。「⑤楽欲とは、欲求の不損である。」その[ヨーガ行]者の、形態は、諸元素自体によって、[すなわち]諸形(mūrtyi)等によって、損なわれることはないのである。「水におけるように、地において、浮かび、そして、沈むのである。」<3>

sūkṣma-viṣaya-samyama-jayāt siddhim āha — {vaśitvam} / bhūtāni pṛthivy-ādīni bhautikāni go-ghaṭa-ādīni / teṣu vaśi svatanthro bhavati / teṣāṃ tv avaśyas tat-kāraṇa-tanmātra-pṛthivy-ādi-paramāṇu-vaśikārāt tat-kārya-vaśikārah / tena yāni yathā<sup>ˆ</sup>avasthāpayati tāni tathā<sup>ˆ</sup>avatiṣṭhanta ity arthaḥ / <4>

《3》微小なる(sūkṣma)対象(viṣaya)への総制という征服に基づいて [生じる]成就力を、述べる。「⑥統治者性」とは、諸元素とは、地等であり、諸々の元素よりなるものとは、牛・瓶等である。[ヨーガ行者は、] それら [諸元素・元素からなるもの] に関して、統治者と、独立なものと、なるも、それら [諸元素・元素からなるもの] にとって、被統治者ならざるものであり、それら [諸元素・元素からなるもの] の原因である、唯/微細元素、地等の [原因である] 極微の統治(vaśikāra)に基づいて、その [諸

元素・元素からなるもの]の結果に対して統治するものである。それによって、[ヨーガ行者が][諸元素等を、]止住せしめる、そのように、それら[諸元素等]は、止住するのである、という、意味である。<4>

anvaya-visaya-samyama-jayāt siddhim āha — {īśitṛtvam} / teṣāṃ bhūta-bhautikānām vijita-mūla-prakṛtiḥ san yaḥ prabhava utpādo yaś ca'apyayo vināśo yaś ca vyūho yathāvad avasthāpanaṃ teṣāṃ iṣṭe / <5>

《4》隨行(anvaya)の対象への総制という征服に基づいて[生じる]成就力を述べる。「⑦支配者性」とは、[それによって、]根本原質を征服した[ヨーガ行]者は、それら、諸元素・元素からなるものたちの、「発生」[すなわち]生起、そして、「消滅」[すなわち]滅失、そして、「配置」[すなわち]いくばくかの、止住、という、それらを、「支配する」のである。<5>

arthavattva-samyamāt siddhim āha — {yatra-kāma-avasāyitvaṃ satya-saṃkalpatā} / vijita-guṇa-arthavattvo hi yogī yad yad-arthatayā saṃkalpayati tat tasmai prayojanāya kalpate / viṣam apy amṛta-kārye saṃkalpya bhojayañ jīvayati'iti / <6>

《5》有目的性(arthavattva)への総制に基づいて[生じる]成就力を述べる。「⑧欲望場住者性とは、真実の思惟性のことである。」実に、グナ美德の有目的性を征服した、ヨーガ行者は、それを目的として、思惟するところの、そのものを、その、目的の為に資するのである。[ヨーガ行者は、]毒をも、甘露の結果に関して、思考した後、摂取せしめつつ、生かすのである、から。<6>

syād etat / yathā śakti-viparyāsam karoty evaṃ pada-artha-viparyāsam api kasmān na karoti / tathā ca candramasam ādityaṃ kuryāt kuhūṃ ca sinibālim ity ata āha — na ca śakto'apī'iti / <7>

[ならば]次のように、なるであろう。[ヨーガ行者は、]能力の顛倒を作為する、そのように、どうして、事物の顛倒を作為しないであろうか？

また同様に、月を太陽に作為し、新月を新月の女神に[作為しないであろうか]？ という、この故に、述べる。「[能力があるとしても、[かのヨーガ行者は、事物の顛倒を、作為することは]ないのである。』と。<7>

na khalv ete yatra kāma-avasāyinas tatra bhavataḥ parameśvarasya'ājñām atikramitum utsahante / śaktayas tu pada-arthānām jāti-deśa-kāla-avasthā-bhedena'aniyata-svabhāvā iti yujyate tāsu tad icchā-anuvīdhānam iti / <8>

実に、あるものに関して、欲望を止住せしめるところの、その〔ヨーガ行者〕たちは、そのあるものに関して、現存せる、最高自在者の、命令を凌駕することが出来ることはないのである。諸事物の諸々の能力は、類・場所・時間・状態の別異性によって、本性が必然的に定まったものではないのである。したがって、それら〔諸能力〕に関しては、そのことは、欲求に随順する、ということが、妥当するのである。ということである。<8> {etāny aṣṭa-aiśvaryaṇi} / {tad-dharma-anabhigāta} iti / aṇima-ādi-prādurbhāva ity anena'eva tad-dharma-anabhigāta-siddhau punar-upādānaṃ kāya-siddhivad etat sūtra-upabaddha-sakala-viśaya-samyama-phalavattva-jñāpanāya / sugamam anyat //45//<9>(Tvai ad VYs II -45)

「以上が、8つの、自在力である。」「その属性による非損がある。」というの、〔以下の通りである〕。「微細さ等の発現がある」という、まさしくこの故に、「その属性による非損」が成就するのであるから、再度言及するのは、身体の成就(siddhi)〔の場合と〕同様、〔ヨーガ行者が、〕そのストラと結びついたすべての対象への総制の結果を有する者であることを知らしめることの為である。別のことは、わかりやすい。<9>

### III. 自在力の変容

「ヨーガ行者の8種類の自在力」という論題の下、前節までで、Csに見られるタイプAと、VYsに見られるタイプBについて、概観した。歴史的には、もしかしたらより古い整理・分類法を反映したものと言えるかも知れない仏教の伝統における用例は、本稿の続編に譲るべく、今回は触れられない。諸般の制約により、本稿をひとまず閉じようとするが、それに当たっては、以下に、Ysに対するボージャデーヴァ Bhojadeva による註釈 Vṛtti(BhYs)、『マールカンデーヤ・プラーナ』Mārkaṇḍeya-purāṇa(Mp)、『ヤージュニャヴァルキヤ法典』Yājñavalkya-smṛti(Yvs)、及びその Yvs に対するヴィジュニャネーシュヴァラ Vijñeśvara による Mitākṣarā 註(ViYvs)、『カターサリットサーガラ』Kathāsaritsāgara(Kss)に見られる、「8種類の自在力」に関連する用例をみておきたい。これら(xii)(xiii)(xiv)(xv)(xvi)は、本稿の続編で問題とされる仏教諸典籍における「超能力」の扱い、及びその整理・分類の変遷と共に、「ヨーガ行者の8種類の自在力」をより広い視野の下に考察を進める際の、注意すべき視点を提供するものと考えられるからである。

(xii) animā parama-aṇu-rūpatā-āpattiḥ / mahimā mahattvam / laghimā tūla-piṇḍaval laghutva-prāptiḥ / garimā gurutvam / prāptir aṅguly-agreṇa candra-ādi-sparśana-śaktiḥ / prākāmyam icchā-anabhighātaḥ / śarīra-antaḥkaraṇa-īśvaratvam īśitvam / sarvatra prabhaviṣṇutā vaśitvam, sarvāṇy eva bhūtāni anuḡāmitvāt tad uktam na<sup>^</sup>atīkrāmanti / yatra kāma-avasāyo yasmin viṣaye<sup>^</sup>asya kāma icchā bhavati tasmin viṣaye yogino vyavasāyo bhavati taṃ viṣayaṃ svikāra-dvāreṇa<sup>^</sup>abhilāṣa-samāpti-paryantaṃ nayanti<sup>^</sup>ity arthaḥ / ta ete<sup>^</sup>anima-ādyāḥ samādhy-upayogino bhūta-jayād yoginaḥ prādurbhavanti / yathā parama-aṇutvam prāpto vajra-ādinām apy antaḥ praviśati / evaṃ sarvatra yojyam / ta ete<sup>^</sup>anima-ādayo<sup>^</sup>astau gunā mahā-siddhaya ucyante / kāya-sampad vakṣyamāṇā tām prāpnoti / tad-dharma-anabhighātāś ca tasya kāyasya ye dharmā rūpa-ādayas teṣām anabhighāto nāśo na kutaś cid bhavati / na<sup>^</sup>asya rūpam agnir dahati na vāyuh śoṣayati<sup>^</sup>ity ādi yojyam //45// ( BhYs III -45:p.44, ll.5-14)

(12) 「①微細さ」とは、極微の体性を得ることである。「②大きさ」とは、大性である。「③軽さ」とは綿房(tūla-piṇḍa)のように、軽性に到達することである。「④重さ(gariman)」とは、重性(gurutva)である。「⑤到達」とは、指先によって、月等に接触する能力である。「⑥楽欲」とは、欲求の不損である。「⑦支配者性(īśitva)」とは、身体・内官の自在者性である。「⑧統治者性」とは、一切に関する、主権性(prabhaviṣṇutā)である。まさしく一切の諸元素は、随従する者であるが故に、言われた、そのことを、凌駕しないのである。『ヨーガスートラ註解』に言う⑧欲望住者性云々とは、「そのものに関して、欲望が止住する、その対象に関して、その者に欲望、[すなわち] 欲求が、生じる、ところの、その対象に関して、[その] ヨーガ行者に、決定(vyavasāya)が、生じる。その対象を、入手を媒介として、欲望(abhilāṣa)の達成(samāpti)という終焉へと導く、という意味である。他ならぬそれら、「微細さ」等が、三昧を受用したならば、諸元素の征服があるので、ヨーガ行者に、発現するのである。すなわち、極微性に到達した者は、金剛等に対しても、内部に、進入するのである。一切に関して、同様に、考えられるべきである。まさしくそれら、「微細さ」等が、8種類の、大成就力(mahā-siddhi)であると言われるのである。「身体の完成」

は、[次のスートラで] 述べられるであろう。[ヨーガ行者は] その[身体の完成] に、到達するのである。そして、「その[身体]の属性の非損」とは、その、身体の有する、形体等の、諸属性、それらの非損、[すなわち] 滅が、いかなる原因によっても、ないということである。その[ヨーガ行者] の、体を、火が、焼くことはないし、風が、破壊することはない、等と、考えられるべきである。

(xiii) aṇimā laghimā ca'eva mahimā prāptir eva ca /  
 prākāmyaṅ ca tathā'īśitvaṃ vaśitvaṅ ca tathā'aparaṃ //29//  
 yatra-kāma-avaśayitvaṃ gunān etāṃs tathā'aiśvarān /  
 prāpnoty astau nara-vyāghra paraṃ nirvāṇa-sūcakān //30//  
 sūkṣmāt sūkṣmatamo'ṇīyāṅ chighratvaṃ laghimā guṇaḥ /  
 mahimā'āśeṣa-pūjyatvāt prāptir na'aprāpyam asya yat //31//  
 prākāmyam asya vyāpityād īśitvaṅ ca'īśvaro yataḥ /  
 vaśitvād vaśimā nāma yoginaḥ saptamo guṇaḥ //32//  
 yatra'icchā-sthānam apy uktam yatra-kāma-avaśāyitā /  
aiśvaryya-kāraṇair ebhir yoginaḥ proktam astadhā //33//  
 mukti-saṃsūcakam bhūpa paraṃ nirvāṇam ātmanaḥ / (Mp XL-29 ~ 34:p.236)

(13) 人虎 [=王] よ、[ヨーガ行者は、] ①微細さ、及び②軽さ、③大いさ、さらに④到達、同じく⑤楽欲、そしてまた⑥支配者性、さらに他に⑦統治者性、⑧欲望場住者性といった、そうした、完全に、涅槃(nirvāṇa)を指し示す(sūcaka)、8 つの、自在者的な(aiśvara)諸属性(guna)を、獲得するのです。

〔「微細さ」とは〕微小なるものよりも、さらに微細にして、極微小なるものである〔ことであり、〕「軽さ」とは、素早いこと、という属性である。「大いさ」とは、残りなく供養さるべきであるが故に。「到達」とは、この者にとって、到達されざるものがない〔ということである。〕この者には、「楽欲」がある、遍充するものであるが故に。また、自在者であるが故に「支配者性」がある。統治者であるが故に、ヨーガ行者には、「統治者性」という名称の、第7番目の属性がある。「欲望場住者性」とは、いかなるものに関しても、欲求の実現が〔ある〕とも言われたのである。こうした自在力の諸原因によって、王よ、ヨーガ行者にとって、解脱を指し示す、アートマンの、最高の、涅槃を、8様に、述べたのである。



(xiv) antardhānaṃ smṛtiḥ kāntir dṛṣṭiḥ śrotra-jñatā tathā /

nijaṃ śarīraṃ utsrjya para-kāya-praveśanam //202//

arthhānāṃ chandataḥ sṛṣṭir yoga-siddhes tu lakṣaṇam /

siddhe yoge tyajan deham amṛtatvāya kalpate //203// (Yvs III-202 ~ 203:p.399)

(14) 「⑧隠失」、⑥ [前世] 想起、⑦ [超] 魅力、④ [超] 視、⑤ [超] 聴知者性、①自分の身体を出離して他者の身体に入ること、⑦恣意的な、諸対象物の創造、しかるに [以上が] ヨーガの成就力の、特徴である。ヨーガが成就したならば、身体を棄捨して、不死性に資応する。」

(xv) anima-prāptyā parair adṛśyatvam {antardhānam}, {smṛtir} atīndriyeṣv artheṣu manvāder iva smarānam, {kāntiḥ} kamanīyatā, {dṛṣṭir} atīta-anāgatesv apy artheṣu, tathā {śrotra-jñatā} atidaviyasi deśe^abhivyajyamānatayā śrotra-patham anāseduṣām api śabdānāṃ jñātrtā, {nija-śarīra-tyāgena para-śarīra-praveśanam}, sva-vāñchā-vaśena^ {arthhānāṃ} karaṇa-nirapekṣatayā {sṛṣṭiḥ}, ity etad yogasya {siddher lakṣaṇam} līngam / na ca^etāvad eva prayojanam, kiṃ tu siddhe yoge {tyajan deham amṛtatvāya kalpate} brahmatva-prāptaye ca prabhavati // (ViYvs III-202 ~ 203:p.399)

(15) 「⑧隠失(antardhāna)」とは、「微細さ」の獲得によって、他者たちによって、見られざる者であること(adṛśyatva)である。「⑥想起」とは、超超官的、諸対象物を、マヌ等の如く、想起することである。「⑦魅力」とは、愛らしさ(kamanīyatā)である。「視」とは、過去・未来のものであれ、諸対象物に関する [もの] である。同様に、「⑤聴知者性(śrotra-jñatā)」とは、極遠の、場所にあつて、聴道を、迎ふことのないものであろうとも、諸音声を、明瞭なものとして、知る者たること(jñātrtā)である。「本来の身体を捨てて、①他者の身体に入ること」である。「③諸対象物に対する [欲求に基づいて]」、[すなわち] 自らの願望(vāñchā)の力(vaśa)による、手段に依拠することなき、「創造」である。以上のものが、ヨーガの「成就力の特徴」、[すなわち] 徴表である。そして、他ならぬこれほどのものが、目的であるということはないのである。そうではなくて、ヨーガが成就したならば、「身体を、捨離して、不死性に、資するのである。」[すなわち] ブラフマン性(brahmatva)に資応するのである。

(xvi) atra-antare ca pātāle tasmin deva-kule sthitam /

sarvair vṛtam avocāt tam evaṃ candraprabhaṃ mayah //77//

rājann eka-manā bhūtvā śṛṇv idānīm anuttamam /  
 upadekṣyāmi te yogam anya-deha-praveśa-dam //78//  
 ity uktvā ākhyāya sāmkhyaṃ ca yogaṃ ca sa-rahasyakam /  
 yuktiṃ deha-antara-āveśe tasmād upadideśa saḥ //79//  
 jagāda ca sa yogi-indraḥ sā'eśā siddhir idaṃ ca tat /  
 jñānaṃ svātantryam aiśvaryaṃ aṇimā-ādi-niketanaṃ //80//  
 atra aiśvarye sthitā mokṣaṃ na vāñchanti sureśvarāḥ /  
 etad-arthaṃ japa-tapaḥ-kleśam anye'api kurvate //81//  
 samprāptam api na icchanti svarga-bhogaṃ mahā-āśayāḥ /  
 tathā ca śrūyatām atra kathāṃ vaḥ kathayāmy aham //82// (Kss 45-77 ~  
 82:p.211)

(16) そして、その時、パーターラの、その神殿の中で、一切の者たちによって取り囲まれて在りし、かのチャンドラプラバに対して、以下のように、マヤは、語りました。<77>

「王よ、あなたは、一心となりて、今や、無上なるものを、お聞き下さい！  
 わたしは、あなたに、他者の身体に入ること(praveśa)を為す、ヨーガについて、教示しましょう。」<78>

と言った後に、秘密の、サーンキヤとヨーガを、解説し、その[サーンキヤとヨーガに] 基づく、別の身体(deha-antara)に入ること(āveśa)、に関する、技法(yukti)を、かれは、教示しました。<79>

そして、その偉大なヨーガ行者は、語りました。「これが、その成就力(siddhi)であり、そして、これが、「微細さ」等の殿堂(niketana)、独立力(svātantrya)、自在力(aiśvarya)であります。<80>

神々の長たちは、この、自在力に、住しつつも、解脱を、願うことはありません。その[自在力の] 為に、別の者たちもまた、誦呪・苦行・煩悩を為すのです。<81>

高尚な者たちは、仮に得られたとしても、天界の享受を、望むことはありません。また、同様に、お聞き下さい。わたしは、あなたがたに、このことに関する、物語を、語りましょう。<82>

(xii)は、Vyāsa の VYs によって明らかになる Ys III-45 中の「aṇimā 等」の「8種類の自在力タイプB'」に対する変形タイプB' を与える用例である。この8分類法は、先に見た Nk の記述(vi)にも反映している。(xiii)は、Vyāsa に

よる8分類法—タイプBに対する別の列挙順と、第8番目の超能力名に対する術語の別表記を与えるものとして重要である。(xiv)は、Cs IV-1-140の8分類法—タイプAの変形タイプA' というべきものという点で貴重である。列挙の順番が異なっているばかりか、8分類ではなく、第2番目の「知者性」が欠落した、7分類というべきものになっている。さらにそれに対する註釈たる(xv)には、8分類法タイプAの第8番目「隠身」が、8分類法タイプBの第1番目の「微細さ」と結びつけて説明されている点が注目される。また、それと同様に、Kssにおける(xvi)は、自在力の整理・分類の意思とは無縁であるものの、8分類法タイプAの第1番目にある「入」が、やはり「微細さ」等のタイプBとの関係で問題になっているのを看過すべきではないであろう。(未完)

《略号》

BhYs: Bhojadeva's Vṛtti ad Ys → Ys

Cs: Caraka-saṃhitā(Kashi S.S. 228:1984[Reprint of NSP Ed.1941])

CCs: Cakrapānidatta's Āyurvedadīpikā ad Cs → Cs

DSs: Ḍalhaṇa's Nibandhasaṅgraha ad Ss → Ss

GCs: Gaṅgādhara Kaviratna's Japalakpataru ad Cs(Kashi Ayurveda S. 1:2002[2ndEd.])

Kss: Kathāsarisāgara(NirṇayaEd.,1977[3rdEd.,1915])

Mbh: Mahābhārata(Text:PoonaCrEd.,1971-)

Mp: Mārkaṇḍeya-purāṇa (BI 29,1980r)

Nk: Nyāyakośa(Poona,1978r)

Ss: Suśruta-saṃhitā(Jaikrishnadas Ayurveda S. 34:1980[4thEd.])

Tvai: Tattvavaiśārādī ad VYs → Ys

Ys: Yogasūtra(An.S.S. 47:1919[2ndEd.])

Yvs: Yājñavalkyasmṛti (NirṇayaEd., 1949[5thEd.])

Vi: Vivaraṇa ad VYs (Madras, 1952)

VYs: Vyāsa's Bhāṣya ad Ys → Ys

ViYvs: Vijñeśvara's Mitākṣarā ad Yvs → Yvs

Lindquist,S.[1935]:*Siddhi und Abhiññā*,Uppsala

Meulenbeld,G.Jan[1999]:*A History of Indian Medical Literature*, Vol.1A&1B,Groningen

金倉圓照[1978]:「チャラカ医典の数論説—Caraka-Saṃhitā 4,1の和訳と解題—」『鈴木学

術財団研究年報』15号 1-15頁

中村元[1989]:『シャンカラの思想』(岩波書店)

原実[1985]:「Yoga Sūtra III-37」『雲井昭善博士古稀記念 仏教と異宗教』(平楽寺書店)  
41-56頁

本多恵[1978]:『ヨーガ書註解』(平楽寺書店)

山下勤[1998]:『インド伝承医学文献における個体論—Śārīrasthānaの研究—』学位論文(京都大学)

#### 《註記に代えての附記》

本稿は、Cs「身体論篇」中の「ヨーガ行者の8種の自在力」を伝えるフレーズに註記を付す作業の一環として構想されたものである。したがって、本稿そのものが一註記に過ぎないとも言えるのである。拙稿「坐処考—ヨーガ行者のいる風景—」『駒大仏教学部論集』34号(2003.10) 390-355頁と、ほぼ同時期に着手し、ほぼ同時期に一応の体裁を整えたものであるが、諸般の事情もあって、なぜか発表の機会に恵まれず、その後もずるずると増広を重ねた結果、今日に到ってしまった。内容が内容だけにいつまでも手元に置いて、「お蔵入り」の覚悟もした程であるが、やはり諸般の事情からそうも行かず、ひとまずこの一部分だけでも、世に解き放つべきと観念した次第である。浅学の身では、テキストの解説も難解を極め、先学による訳例や研究を参照させていただいた。それらの一々だけでも註記として記すべきであるが、当然ながらその作業だけでも、目下の状況ではままならないものがある。したがって、通常の意味での註記は一切割愛した。ご寛恕願いたい。

Cs 当該本文の解説に当たっては、山下[1998]、金倉[1978]、Meulenbeld[1999]に負うところ大である。また、Ys 及び VYs の解説に当たっては、その和訳に対して不満が多々あるとはいえ、本多[1978]に負うところが大である。ヨーガと超能力に関しては、原[1985]に負うところが大である。また、東北大学の後藤敏文氏のおかげで参照することを得た Lindquist[1935]は、この分野の研究では不可欠の成果と言える。

筆者がこうして本稿を遂に放棄することがなかったのは、ヨーガ哲学に関する文献学的研究の中にさりげなく置かれた「ただシャンカラ学派の場合には、八種の自在力をどこまで本気で信じていたかどうかは疑問である。恐らくは『ヨーガ・スートラ』などに書かれているから、そのまま鸚鵡がえしに言っているだけであろう。今日のシャンカラ派の人々はこのようなことをまともに信じていない。今日のインドではシャンカラ派の行者や信徒が群をなして移動するときには、バスを借り切るし、シャンカラチャーリ

「ヤは自家用車に乗って行く。」(中村[1989] 653-654 頁)と、「YS Ⅲ-37の精神性を強調する余り、Yoga に神通力軽視、更には排斥の思想を読む危険のあることは学者の指摘するところである・・・YS は神通力を否定したのではなく、その濫用を戒めたにすぎない。蓋し、神通力を現じ得ぬ如きはもともと行者の名に値せぬ故である。」(原[1985] 56 頁)といった、アンビヴァレントな言辞の衝撃によるものである。(2004 年 夏)